

ISSN 1882-0468

ISSN-L 1882-0468

NDL 書誌情報ニュースレター

2010年2号(通号13号)

目次

国立国会図書館の書誌サービスの新展開	(収集書誌部)	1
ウェブ版の国立国会図書館件名標目表(Web NDLSH)を公開しました	(収集・書誌調整課 書誌調整係)	8
お知らせ：公開講演会「セマンティック・ウェブと図書館」を開催します	(収集・書誌調整課)	14
お知らせ：国立国会図書館ダブリンコアメタデータ記述(DC-NDL)を掲載しました	(収集・書誌調整課 書誌調整係)	15
お知らせ：国立国会図書館月報 平成22年6月号(No.591)の記事紹介	(NDL 書誌情報ニュースレター編集委員会)	16
コラム：書誌データ探検 団体名の標目 —企業、大学、一筋縄ではいかない団体名標目の選び方	(NDL 書誌情報ニュースレター標目探偵団)	17
掲載情報紹介		20
編集者からの一言		21

国立国会図書館の書誌サービスの新展開

本誌 2008 年 2 号(通号 5 号)でご紹介したように、国立国会図書館(以下、NDLといたします)では、2008 年 3 月に「[国立国会図書館の書誌データの作成・提供の方針\(2008\)](#)」を公開しました。この方針はウェブの時代に対応するため、書誌データを誰もが自在に利用できるようにすること、目録の役割をその機能と収録範囲の両面から拡大することに重点を置くもので、平成 20 年度からの 5 年間の展望を描いていました。

同年 12 月に、NDL は全館の将来構想として「[創造力を生み出す新しい知識・情報基盤の構築を目指して—国立国会図書館の取組—](#)」を取りまとめました。この構想に基づき、情報システムの更新時期(2012 年初め)を目安として、多様な利用者のための新しい図書館サービスを提供しようとしています。

新しい図書館サービスの礎となるべく、刻々と変わる技術環境のもとで今日の時代にふさわしい書誌サービスを提供するため、新方針で定めた目標をどのように展開し、具体化していこうと考えているかについてご報告したいと思います。

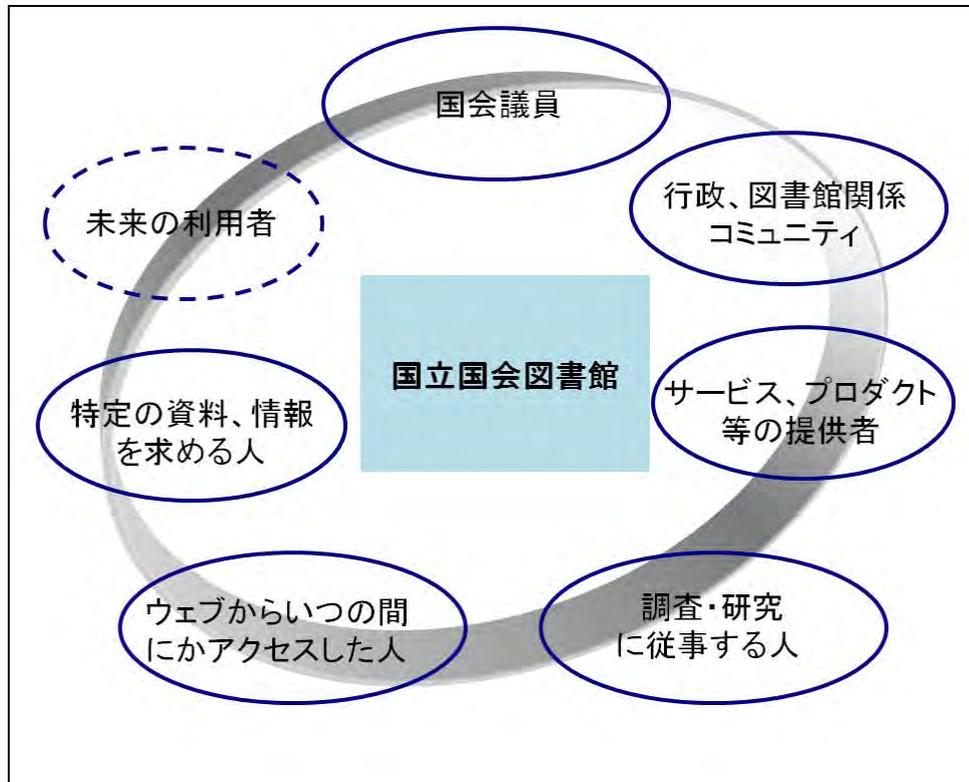
目次

1. NDL の利用者像と書誌サービス
2. 書誌サービスの機能領域
 - (1) 探索機能の向上
 - (2) 書誌データ提供機能の改善
 - (3) 書誌データ作成プロセスの見直し
 - (4) 書誌調整機能
3. 新しい書誌サービスの具体的な展開
 - (1) 実現できたこと—2008～2009
 - (2) 進展中のもの—2010～
4. おわりに

1. NDLの利用者像と書誌サービス

図1のとおり、インターネットの普及によりNDLの利用者は従来と比較にならないくらい広がり、ニーズも多様化してきました。

(図1) NDLの利用者像



新しいサービスの拠点となるインターネットには、次のような利用者が存在しています。

- a NDLの所蔵資料を利用しようとする利用者
- b 検索エンジンなどからいつの間にかNDLのサービスにアクセスしている利用者
- c NDLのデータを活用し、第三者にサービスを提供する利用者

外部のサービス提供者によってナビゲートされた利用者がNDLにアクセスし、さらにNDLの様々なサービスによって外部のサービスに再びナビゲートされることで、NDLの多様で、かつ組織化された資源（それは資料に限らず、書誌データやレファレンス情報などを含みます）が有効に利用されるサイクルが形成されるのです。

その際、NDLが提供する資源と利用者をつなぐ情報探索のためのサービスが、使いやすいものであり、提供する情報が確かで有効なものであることがたいへん重要となってきます。それを支えるものが、信頼性の高い書誌データであると言えます。

情報探索のためのサービスは、現在の書誌サービスの役割を拡張するものです。また、書誌データ自体も、利用者のニーズに合わせて新たな形式や方法によって提供していく必要があります。

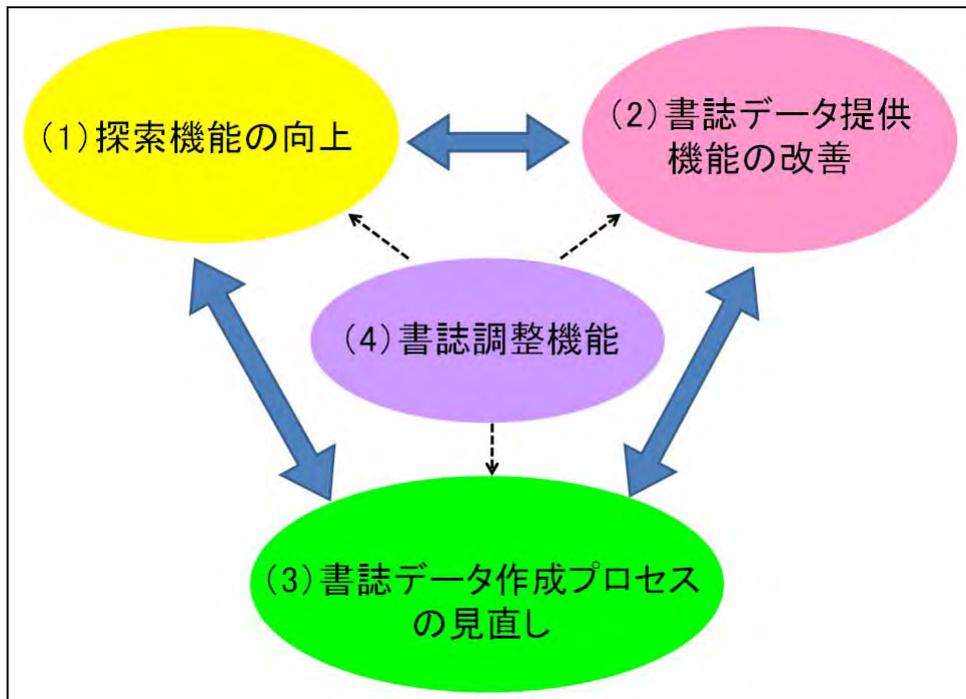
今後の書誌サービスは、[国立国会図書館蔵書検索・申込システム \(NDL-OPAC\)](#)、総合目録といったNDLでこそ可能なサービスを統合的に組み合わせ、さらに他のサービスに連携を広げていくことによって、情報の探索機能を向上させることを目指します。同時に、NDLが作成した書誌データ

自体をこのようなサービスから容易に入手できるように、書誌データ提供の機能を改善していきます。

2. 書誌サービスの機能領域

書誌サービスは、図2のとおり、(1)探索機能と(2)書誌データ提供機能を、(3)書誌データ作成プロセスという基盤が支え、(4)書誌調整機能がこれらを束ねるという関係にあります。本章では、これらの四つの領域について、今後の方向性を示したいと思います。

(図2)「書誌サービスの四つの領域とその方向性」



(1) 探索機能の向上

利用者が情報を探索し、適切な資源へアクセスするためには、次の点が重要となります。

a 総合性・統合性

日本全国書誌、NDL-OPAC、雑誌記事索引、総合目録など、それぞれ別サービスとなっている各目録を統合・連携させ、一つの入口から統合的な検索ができると同時に、各サービスへのナビゲートができるようにします。

b 対象の多様性

検索の対象に電子情報を含む「[資料収集の指針](#)」、「[資料収集方針書](#)」に基づき収集した NDL の資料のみならず、他機関の情報資源にも広げます。従来の書誌データだけでなく、さまざまなメタデータ、付加的な情報（目次情報など）、フルテキスト（本文）、主題情報なども、構造的な形で探索できるようにします。

c 典拠データの活用

利用者が資源を発見、識別、選択することを支援するために、コントロールされた典拠データを有効に活用できる補助システムを開発します。

d 補完機能の充実

検索がヒットしない場合でも利用者が結果を得られるナビゲート機能や、利用者による設定が保存可能な機能を備えるなど、補完機能を充実させます。

(2) 書誌データ提供機能の改善

全国書誌を作成する機関として、書誌データを確実に作成し提供することは、NDLの重要な使命の一つです。多様な利用者へのサービスを目指して、従来の書誌データファイル製品を頒布する方式から、インターネット経由で書誌データを入手できる方式に、提供方法の重点を移します。あわせてNDLの書誌データの普及、認知度の向上を図ります。

a 有用でよりどころとなるデータ

納本制度により広範に収集したNDL所蔵資料に基づき作成した、標準的で体系化された書誌データ、典拠データを提供します。

また、これらのデータを [OCLC \(Online Computer Library Center\)](#)、[バーチャル国際典拠\(VIAF\)](#) などの国際機関を通じて海外へも提供し、我が国を代表する標準的データとして扱われるようにします。このためにも、文字コードをUnicode化して多言語対応ができるようにしていきます。

同時に、データ内容の包括性、完全性を期して、未入力資料をさらに遡及入力し、既存のデータ内容の見直しを進めます。

b 自由に使えるデータの提供

プロトコル連携(Z39.50、SRW等)、API(Application Program Interface)の公開などにより、NDLの書誌データ、典拠データをより自由に利用できるようにします。同様に、外部のサービス提供者(検索エンジンなど)が、NDLの書誌サービスを組み込んだサービスを展開できるようにします。

c 柔軟な形式のデータの提供

書誌データ、典拠データの国際的な提供や交換をより円滑にするため、原則として、提供フォーマットを事実上の国際標準である [MARC21 フォーマット](#) とします。さらに汎用的な活用を促進するため、[RDF](#) 形式で各種データを公開します。

(3) 書誌データ作成プロセスの見直し

利用する人にとって、使いやすく、かつ適時のデータ提供が行われるようにするため、書誌デー

タの作成プロセスを改善します。2010年3月に開催した「[日本全国書誌の在り方に関する検討会議](#)」において、公共的な書誌情報としての全国書誌に関する重要性と課題を確認しましたが、今後関係機関と協力・調整し、作成の迅速化に向けた新しい枠組みを検討します。

a 書誌データ作成の迅速化

2009年1月に、外部民間 MARC を部分的に導入し、従来の多段階にわたったチェックポイントを最小限の段階に減じただけでなく、収集・受入プロセスとの可能な限りの統合も図り効率化を進めています。

b 外部資源の活用

MARC 以外の内容細目、目次情報、記事情報などの外部資源について調査し、活用可能性を検討します。

c インプロセスデータの公開

より早い時点におけるデータの入手について出版・流通分野の協力を得て実現し、入手したデータをインプロセスデータとして、納本後間もない時点で公開することを検討します。ただし、資料が利用可能となる前のデータ公開となるため、利用者の混乱を招かないことには十分注意します。

d 関係機関との協力

国立情報学研究所の [NACSIS-CAT](#) をはじめ、関係機関の書誌データ作成システムとの将来的な連携の可能性を探っていきます。

(4) 書誌調整機能

次世代の目録規則として、「[書誌レコードの機能要件 \(FRBR\)](#)」基本モデルとした各種基準が形成されようとしています。NDL は、日本の中心的な書誌データ作成機関として、積極的に書誌調整の役割を果たし、標準化の観点から日本の書誌データおよび目録の在り方そのものを考えていきます。

a 国際的な書誌調整

従来、書誌データの基本方針として扱われてきた通称 [パリ原則](#) (1961年に国際目録原則会議で採択) に代わるものとして、FRBR に基づく「[国際目録原則覚書](#)」が2009年2月に確定しました。国際的な代表的目録規則である「[英米目録規則 \(AACR2\)](#)」も時代に合わせたものに脱皮して [RDA \(Resource Description and Access\)](#) に変わろうとしています。これらの動向を注視しながら、主要文献の国内への紹介、国際図書館連盟 (IFLA) 参加、ISSN 日本センター業務等を通じて、国際的な検討にも参画します。

b 国内における書誌調整

国内においては、[書誌調整連絡会議](#)の開催を通じて日本図書館協会（JLA）を始めとする国内主要機関との連携を強化し、常に課題に対処していきます。

当面の課題としては、[JLA 目録委員会](#)による「日本目録規則（NCR）」の国際的動向に依拠した改訂、[JLA 分類委員会](#)による「日本十進分類法（NDC）」の改訂への協力、[JLA 件名標目委員会](#)との協同による「[国立国会図書館件名標目表（NDLSH）](#)」と「基本件名標目表（BSH）」の連携などがあります。

c 電子情報資源の書誌調整—DC - NDL

電子化資料、デジタルアーカイブ、外部の電子情報などの電子情報資源をスムーズに検索できるようにするためには、アクセス可能な書誌データ（メタデータ）が必要です。日本の標準的メタデータを構築するために、NDLは、情報資源のメタデータ記述のスキーマとして、DC-NDLを維持・管理していきます。

3. 新しい書誌サービスの具体的な展開

(1) 実現できたこと—2008～2009

「[国立国会図書館の書誌データの作成・提供の方針（2008）](#)」と同じ方向性の取組として、NDLでは、NDL-OPACの改修を行い、[書誌詳細画面への固有URLの表示](#)、[ダウンロード機能の追加](#)、[雑誌記事索引のRSS配信機能の提供](#)、また、[NDL-OPACから外部データベースへのリンク](#)などを開始しました。これらは、NDLの書誌データをより利用しやすくするためのものです。

(2) 進展中のことがら—2010～

a 新システムの構築

冒頭でも述べたように、NDLでは、2012年初めに情報システムのリニューアルを行う予定です。次期システムは、大きく二つのシステムに分かれます。

一つは、OPACです。これは、現在のNDL-OPACと[アジア言語 OPAC](#)を統合したものとなります。このシステムは、書誌データ作成から提供までを行う既存のパッケージシステムを導入して構築します。これに伴って、JAPAN/MARC等のプロダクトの提供形式は、前号の記事「[書誌データのプロダクト提供サービスが変わります](#)」でお知らせしたように、2012年1月からMARC21となります。また、Unicode採用による多言語対応やプロダクト類の収録範囲拡大（アジア言語資料等）を行います。

もう一つは、NDLや他機関の持つ情報を統合的に検索して、最適な入手手段にナビゲートするという情報探索サービスのシステムです。このシステムは、2012年の本格稼働に先立ち、本年夏にプロトタイプを公開します。

二つのシステムは連携して、利用者が、NDLの蔵書目録、総合目録（ゆにかねっと、新聞総合目録、児童書総合目録、点字図書・録音図書全国総合目録）を検索し、NDLも含めて日本の図書館の有する資源を確認でき、電子化資料や外部のOPAC、アーカイブ等に遷移することも可能なツールとなることを目指しています。

b ウェブ版の国立国会図書館件名標目表 (Web NDLSH) の提供

2010年6月から、典拠データのセマンティック・ウェブ対応として、[ウェブ版の国立国会図書館件名標目表 \(Web NDLSH\)](#) を提供しています。Web NDLSH の詳細については、今号の記事「[ウェブ版の国立国会図書館件名標目表 \(Web NDLSH\) を公開しました](#)」をご参照ください。

c DC-NDL 改訂版の公開

[Dublin Core](#) の最新動向と、当館の新しいウェブサービスにも対応するため、2007年5月に公表した「国立国会図書館ダブリンコアメタデータ記述要素」を改訂し、「国立国会図書館ダブリンコアメタデータ記述 (DC-NDL)」としてまとめ、6月に公開しました。

d OCLC を通じた国際的提供

NDL が作成した書誌データの国際的な流通の促進のため、JAPAN/MARC を国際的書誌ユーティリティ OCLC が維持管理するオンライン総合目録 [WorldCat](#) を通じて提供するための覚書を取り交わしました。

JAPAN/MARC(M)(A)の全データを UNIMARC 形式で提供し、本年夏には、OCLC の参加館が日本語資料の整理を行う際に、当館の書誌データをダウンロードできるようになります。一般の利用者も、WorldCat 上で当館書誌データの検索が可能になります。

4. おわりに

納本制度に基づき、多種多様な出版物の網羅的な収集を行う NDL が作成する「日本全国書誌」は、日本を代表する書誌として、その文化的資産の財産目録としての意義を有し、また、データベースとしての利用価値も有しています。NDL は長年にわたり、その情報(目録)を紙からオンラインへと、情報技術の発展とともに進展させてきました。

今、NDL は、国民にあまねく図書館サービスを提供するために、社会生活の情報インフラとして浸透しつつある「インターネットの世界」に存在する利用者に向けて、新しいサービスを展開していこうとしています。

当館の書誌サービスは、「1. NDL の利用者像と書誌サービス」で掲げたような多様な利用者が、いつでもどこでも求める情報に迅速で確かなアクセスや案内ができるよう努めてまいります。NDL や他機関の情報を媒体が紙・電子にかかわらず統合的に検索でき、最適な入手手段にナビゲートするために必要となる、NDL の豊富な資料を背景とした信頼性のある書誌データを多様な形で提供できるよう進めていく所存です。

図書館、出版流通、情報サービス提供など関係機関のみなさまには、今後ともご指導ご協力をいただけますよう、よろしく願いいたします。

(収集書誌部)

ウェブ版の国立国会図書館件名標目表 (Web NDLSH) を公開しました

国立国会図書館では、資料をテーマから検索するための統制されたキーワードである件名標目を、[国立国会図書館件名標目表 \(NDLSH\)](#) として維持・管理しています。2010年6月30日、NDLSHをウェブ上のさまざまなアプリケーションやシステムで活用できるように、「[ウェブ版の国立国会図書館件名標目表 \(Web NDLSH\)](#)」を公開しました。

1. まずは使ってみよう

Web NDLSH では、標目語・参照語を完全一致・部分一致で検索できるほか、[日本十進分類法 \(NDC\)](#)・[国立国会図書館分類表 \(NDLC\)](#) の 2 種類の分類記号から件名標目を検索することができます。試しに、「インターネット」と入力し、検索してみましょう。



へのリンクも生成・表示しています。

当館では2009年8月より、NDLSH作成の際に対応する[米国議会図書館件名標目表\(LCSH\)](#)の識別子であるコントロールナンバーを入力しています。たとえば、「インターネット」の関連語にある「インターネット依存症」をクリックしてみましょう。

件名標目詳細	グラフィカル表示
ID	01178140
件名標目 (skos:prefLabel)	インターネット依存症 (インターネット インゾシヨウ)
同義語 (skos:altLabel)	インターネット依存症 (インターネット インゾシヨウ); ネット依存症 (ネット インゾシヨウ); ネット依存症 (ネット インゾシヨウ); インターネット中毒 (インターネット チュウドク); ネット中毒 (ネット チュウドク); Internet addiction [LCSH]
上位語 (skos:broader)	依存
関連語 (skos:related)	インターネット
分類記号 (skos:relatedMatch)	368 (NDC9); 493.74 (NDC9); ED1 (NDLC); SC374 (NDLC)
関連リンク (skos:closeMatch)	sh97009080 (LCSH)
出典 (dct:source)	000004195213 (書誌ID); 知恵蔵2008(200811)

「インターネット依存症」のページには、「関連リンク」のところにLCのコントロールナンバー「sh97009080」が表示されており、対応するLCSHへリンクすることができます。Web NDLSHでは、このコントロールナンバーをSKOSのcloseMatchを用いて表現しており、LCSHデータへの参照を行うことが可能です。LCのコントロールナンバーを使用することで、標目訂正が行われた場合も、対応するLCSHのデータにリンクできるというメリットがあります。

2. Web NDLSH のデータ形式について

「インターネット」のページの一番下に、「RDF/XML形式」、「RDF/Turtle形式」、「JSON形式」の3つのリンクがあります。

出典 (dct:source)	000002953749 (書誌ID); imidas 2000; 00047300 (BSH4)
編集メモ (skos:editorialNote)	当件名新設(2001年5月25日)以前の整理では、「データ伝送」と「通信網」を合わせて付与。
作成日 (dct:issued)	2001-05-25
最終更新日 (dct:modified)	2009-11-05T17:45:05
参考	インターネット (Wikipedia)
他形式のデータ	RDF/XML形式 , RDF/Turtle形式 , JSON形式

ここをクリックすることで、NDLSH のデータを上記の 3 つの形式でそれぞれダウンロードすることができます。NDLSH の全件データをダウンロードしたい場合は、トップページの「データのダウンロード」から、「RDF/XML 形式」「TSV 形式」の 2 つの形式で取得することができます。[1]

このシステムが一番のミソが、NDLSH データの表現形式です。Web NDLSH では、NDLSH を [SKOS \(Simple Knowledge Organization System\)](#) のモデルを用い、RDF/XML 形式によって表現しています。SKOS とは、シソーラスや分類表等、図書館等でよく使用される知識体系を、セマンティック・ウェブ上で扱える形式で記述できるようにした枠組みで、一方、[RDF](#) とは、セマンティック・ウェブ上であらゆるリソースの記述を行う基本的な表現形式のことです。

NDLSH をセマンティック・ウェブに適した形で提供することにより、コンピュータが NDLSH の構造や意味を自動的に解析、処理できるようになり、ウェブ上のさまざまなアプリケーションやシステムで活用されることが期待されます。

3. 外部との連携

セマンティック・ウェブで、コンピュータが情報を自動的に処理できるようにするためには、URI (Uniform Resource Identifier) によってそれぞれの情報が識別可能であることが重要です。今回の Web NDLSH では、各件名標目に URI を付与し、外部から URI を用いて参照することが可能になりました。たとえば、件名標目「インターネット」の URI は「<http://id.ndl.go.jp/auth/ndlsh/00841024>」です。この URI から「インターネット」という件名標目の情報を取得することができます。また、件名標目の文字列をそのまま使用した URI もデータとして保持しています。したがって、URI 「<http://id.ndl.go.jp/auth/ndlsh/インターネット>」を使用した場合でも、「<http://id.ndl.go.jp/auth/ndlsh/00841024>」と同じ情報を得ることができます。

また、今回のシステムでは、API の一種である [SPARQL](#) というクエリ言語を利用して、外部から検索をかけることができます。クエリの組み方によって、いろいろな検索結果を得ることができるほか、外部システムから自動的に検索をかけ、結果を取得することが可能です。

これまで NDLSH の検索は、[NDL-OPAC](#) という閉じたシステムの中でしか利用できませんでした。しかし、今回のシステムでは、URI や SPARQL によって、外部からも NDLSH を参照したり、検索したりすることが可能になりました。こうした機能を用いて、Wikipedia 等の辞書リソースやソーシャルタギングとの連携など、さまざまなウェブサービスとのマッシュアップが可能になります。

4. これから

現在、データをセマンティック・ウェブに対応した RDF 形式によって広く一般に提供することが世界的な潮流となっています。こうしたデータは、[Linked Open Data\(LOD\)](#) と呼ばれており、下図に示すとおり、LOD は爆発的に増加しています。

名標目の提供を開始した米国議会図書館に続き、2010年4月にはハンガリー国立図書館、ドイツ国立図書館でも書誌データまたは典拠データの RDF 形式による提供が始まっています。[2]

一方、日本国内に目を向けると、LOD の運動はあまり進んでいるとは言えません。今回の NDLSH の SKOS の枠組みを用いた RDF/XML 形式による提供は、日本国内の LOD の進展に向けた意味のある一歩だと自負します。しかし、当館には、NDLSH の他にも、名称典拠データ、NDLC など、まだまだウェブ上で活用しやすい形で提供できていないデータが眠っています。こうしたデータの LOD 化に向けて、今後も検討を進めてまいります。

末筆になりますが、今回のシステム開発・導入作業にあたっては、神崎正英氏に多大なるご尽力を頂きました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

(収集・書誌調整課 書誌調整係)

[1] NDLSH の全件データは、非営利目的に限り、申請なしで自由にダウンロードしていただくことができますが、それに基づき研究成果の発表等を行う場合、ウェブ版の国立国会図書館件名標目表 (Web NDLSH) を利用している点を明記してください。

[2] ハンガリー国立図書館、ドイツ国立図書館における事例については、以下をご参照ください。

<http://current.ndl.go.jp/node/16103>

<http://current.ndl.go.jp/node/16127>

お知らせ：公開講演会「セマンティック・ウェブと図書館」を開催します

近年、図書館をはじめとする情報流通の世界では、「セマンティック・ウェブ」が注目を集めています。セマンティック・ウェブとは、ウェブサイトなどの情報資源に、コンピュータが自動処理を行える形のメタデータを付与することでより高度な情報探索を行う、次世代ウェブの考え方です[1]。

国立国会図書館でも、国立国会図書館件名標目表(NDLSH)の流通性、相互運用性を高めるよう、セマンティック・ウェブでの新たな提供形式を構築するなどの取組を行っています。

この講演会では、セマンティック・ウェブの概念について、国立情報学研究所と国立国会図書館の事例をふまえながら、わかりやすくご紹介します。ぜひお気軽にお越しください。

<講演会の概要>

日時 2010年7月27日(火曜日) 午後2時から午後4時30分 (午後1時30分より受付開始)

会場 国立国会図書館 東京本館 新館講堂

関西館 第一研修室(東京会場からのTV中継)

演題・講師

- ・ 知のリンク：セマンティック・ウェブとは何か
永森 光晴氏(筑波大学大学院図書館情報メディア研究科講師)
- ・ セマンティック・ウェブと学術情報サービス
大向 一輝氏(国立情報学研究所准教授)
- ・ 国立国会図書館 書誌サービスの新展開：Web NDLSH と DC-NDL
大柴 忠彦(国立国会図書館収集書誌部)

講演会の詳細は、下記のページに掲載しています。参加をご希望の方は、ホームページの参加申込みフォームからお申し込みください。定員に達したところで受付を終了します。なお、入場は無料です。

http://www.ndl.go.jp/jp/event/events/bib_lecture_h22.html

当館ホームページ (<http://www.ndl.go.jp>) トップ-「イベント情報・展示会情報」

お問い合わせ先

国立国会図書館 収集書誌部 収集・書誌調整課 書誌調整係

電話 03(3506)3362(直通)

(収集・書誌調整課)

[1]セマンティック・ウェブの動向については、12号のコラムで取り上げています

白石啓. コラム 書誌データ探検 件名(4): 件名標目はウェブの中へ—セマンティック・ウェブ、トピックマップ… NDL 書誌情報ニューズレター. 2010, 2010.3.

http://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo_1166400_po_2010_1.pdf?contentNo=1

お知らせ：

国立国会図書館ダブリンコアメタデータ記述 (DC-NDL) を掲載しました

2010年6月30日、当館サイトの「[書誌データの作成および提供](#)」のページに「[国立国会図書館ダブリンコアメタデータ記述 \(DC-NDL\)](#)」を掲載しました。[Dublin Core](#)の最新動向とともに、当館の新しいウェブサービスにも対応するため、2007年5月に公表した「[国立国会図書館ダブリンコアメタデータ記述要素](#)」(以下、DC-NDL2007年版)を改訂し、「国立国会図書館ダブリンコアメタデータ記述 (DC-NDL)」としてまとめました。

改訂の趣旨については、「[国立国会図書館ダブリンコアメタデータ記述](#)」の「1. はじめに」をご参照ください。

今回の改訂では、DC-NDL2007年版で、語彙の意味レベルの定義(セマンティックス)と、「必須、繰り返し可」等の文法レベルの定義(シンタックス)が混在していた点を改め、両者を分割しました。セマンティックスの定義については「[NDL Metadata Terms](#)」、シンタックスの定義については「[Application Profile](#)」をそれぞれご参照ください。

(収集・書誌調整課 書誌調整係)

お知らせ：国立国会図書館月報 平成22年6月号 (No.591) の記事紹介

「国立国会図書館月報 平成22年6月号 (No.591)」では、[ウェブ版の国立国会図書館件名標目表 \(Web NDLSH\)](#) の提供、国内外の件名標目との連携など、NDLSH の新たな取組みを紹介しています。

また、「主題検索のしくみ」という記事では、[NDL-OPAC](#) をより効果的に使いこなすための件名検索の使い方とともに、件名はどのように選ばれるのかという素朴な疑問を、実際の作業の流れに沿って解説しています。図書館員だけではなく、もっと効率的に資料を探したいという方にも、図書館の仕事に関心のある方にも是非読んでいただきたい記事です。

最後に、「館内スコープ」では、NDL 書誌情報ニューズレターについて取り上げていますので、ご一読いただけると幸いです。編集の雰囲気垣間見ることができます。

国立国会図書館月報 平成22年6月号 (No.591)

(冊子版) ISSN 0027-9153 (オンライン) ISSN 1349 - 3027 編集：国立国会図書館

・「図書館の知識をウェブの世界へ 国立国会図書館件名標目表 (NDLSH) の新展開」 p.10～14 収集書誌部 収集・書誌調整課

・「主題検索のしくみ 本をテーマで探すには」 p.4～9 収集書誌部 収集・書誌調整課、国内資料課

・「<館内スコープ> お得な情報あります」 p.15 収集・書誌調整課 CANE

(NDL 書誌情報ニューズレター編集委員会)

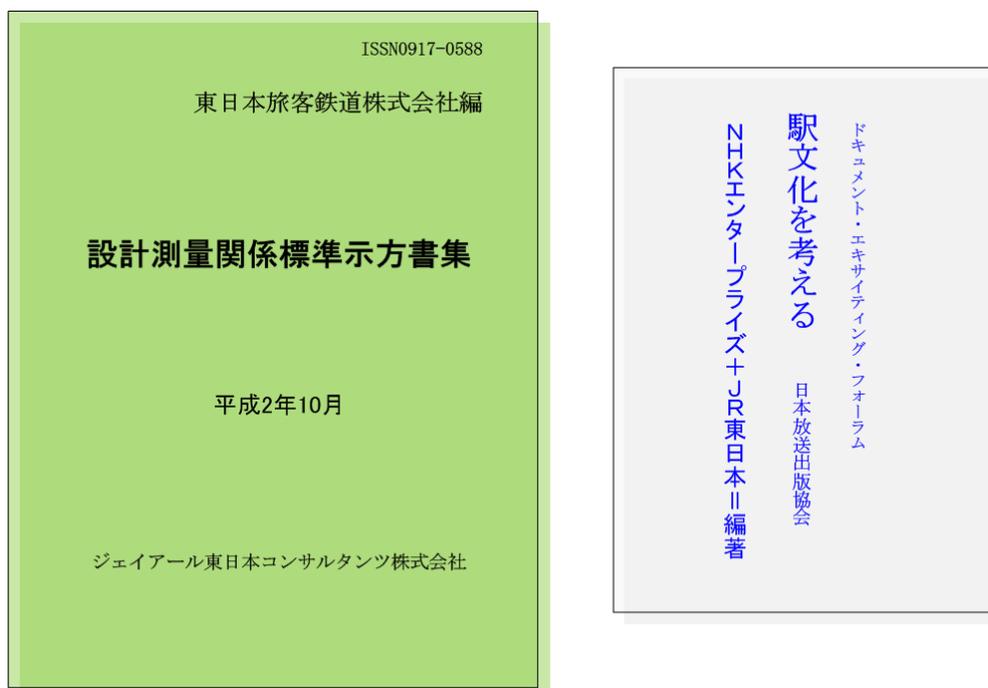
コラム：書誌データ探検

団体名の標目—企業、大学、一筋縄ではいかない団体名標目の選び方

[2008年4号のコラム](#)では個人名の著者標目について取り上げましたが、今回からは2回にわたりもう一つの著者標目である団体名の著者標目を探検してみましょう。

標目を一言で述べると、書誌データを検索するための目じるしのこと。著者標目は、タイトルページなどに表示されている著者、訳者などから選び出します。それらの標目は「典拠レコード」としてデータベースに登録しておき、例えば、同じ名前を持つ著者標目が出てきたときに、同一のものか判断したりしています。著者標目は資料を的確に見わかるために、不可欠のデータです。

ちょうど、ここに二つの本があります。これを例に団体名の標目を選んでみましょう。



左は、「設計測量関係標準示方書集」、パラパラめくってみると、NATM工法、底設導坑先進上部半断面工法・・・難解ですね。右は、「駅文化を考える」、こちらは1987年から2000年まで東京駅で開催されていたコンサート、通称「とうきょうエキコン」の誕生秘話など単なる停車場を超えた駅について熱く語っています。

さて、タイトルページを見ると、最初の資料は「東日本旅客鉄道株式会社編」、次は「JR 東日本編著」と記載されています。ですが、どちらも同じ団体です。うーん、どちらを団体名標目にするべきか悩みどころです。一般的にイメージしやすいのは「JR 東日本」、とはいえ、正式名称の「東日本旅客鉄道株式会社」も捨てがたい。

だったら、両方とも登録すればいいのでは？ 個人名の場合、複数のペンネームを使っている作家は、それぞれのペンネームを標目に登録していたはず。確か、[2008年4号のコラム](#)にはそう書いてあった。カード目録の時代と違って、「をも見よ」参照でデータを連結すれば、双方の標目を漏らさず検索できるしね。仲良く「東日本旅客鉄道株式会社」も「JR 東日本」も標目に登録し、これにて一件落着・・・といかないのが、著者標目の世界なのです。

というのも、一人の人が本名やペンネームなど複数の名前を使っている場合、それらを著作の内容に合わせて意識的に使い分けられていると考えられます。でも、団体名の場合、個人名と違ってそれぞれの名称が確信的に使い分けられているか、資料を一見しただけではわかりません。

そのため、団体名標目では、対象となる団体ごとに一つだけ標目を作成する「統一標目」という考え方を採用しています。図書館員たるもの優柔不断はいけません、潔く「東日本旅客鉄道株式会社」か「JR 東日本」のどちらかを選ばなければならない運命にあるのです。

とはいえ、名称を統一するとしても、よく知られている名前にすべきなのか、最初に出てきた名前にすべきなのか、それともその団体の正式名称とすべきなのか、ルールが決まっていなくて標目がばらばらになってしまいます。「あなたのお好みで」、とはいきません。

そこで、当館では、団体名標目の選択について混乱が生じないように、「[団体名標目の選択・形式基準](#)」というものを定めています。その3-2「名称と読み」には、「名称は、目録対象資料等から正式名称と判断した団体名を採用する。」と記載されています。

先の例も、ようやく決着のときを迎えました。「東日本旅客鉄道株式会社」が勝ち名乗りを挙げたわけです。ごめんね、「JR 東日本」さん、あなたの名前は私の胸の中に大切にしまっておきます・・・ということにはなりません。ご心配なく、先の基準3-2には続けて、「必要に応じて採用しなかった名称を「をも見よ」参照とする。」と記載されています。喧嘩することなくお互い手をつないでいるのですね。ちゃんと「JR 東日本」からも検索できます。

これで迷うことなく次の仕事に邁進できると思いきや、団体名標目にはほかにも個人名にはない難所が待ち構えているのです。次の例を見てください。

	タイトル	責任表示
1	16歳からの東大冒険講座. 1(記号と文化/生命)	東京大学教養学部編
2	国際経済の諸問題	東京大学経済学部編
3	生理学実習	東京大学医学部生理学教室編
4	自己点検・外部評価報告書：東京大学大学院教育学研究科・教育学部	東京大学大学院教育学研究科・教育学部編
5	応用物理学実験	東京大学工学部応用物理学教室編
6	東大式現代科学用語ナビ：キーワードでわかるサイエンスの「いま」	東京大学理学系研究科・理学部編
7	近代中国の思想と文学	東京大学文学部

これらの資料は、東京大学の学部が責任表示に記載されています。だったら簡単、団体名標目は

「東京大学」にまとめてしまえばいい。「を見よ」参照すれば問題ないしね。

うーん、本当にそうでしょうか。確かに、「統一標目」の考え方からすれば、「東京大学」という標目が適切だと思われるかもしれませんが。でも、これらを「東京大学」に統一してしまうと様々な学部の著作が混在することになります。例えば、「東京大学医学部」の資料を検索したい人には十分に絞り込むことができません。また、大学には学部以外にも図書館や大学病院、付属学校等さまざまな施設があります。これらも大学に統一するとますます著作が集中してしまいます。

そこで、「団体名標目の選択・形式基準」では組織の種類ごとに内部組織のどのレベルまでを標目とするかも定めています。今回のような大学の学部は基準の4-10「大学」の[2]にて「大学の学部・学科およびそれらに準じる組織は、大学名を冠した学部名またはそれに準じる組織名を標目とする。」と定めています。よって、「東京大学医学部」や「東京大学教養学部」などの学部を標目に採用することになります。こうして探したい資料が検索結果に埋もれることを排除しているのです。

と、ここまで駆け足ではありましたが、団体名著者標目の選び方をご紹介いたしました。次回は別の観点から、団体名著者標目の世界を巡ってみたいと思います。

(NDL 書誌情報ニューズレター標目探偵団)

掲載情報紹介

2010年4月1日～2010年6月30日に、国立国会図書館ホームページに掲載した書誌情報に関するコンテンツをご紹介します。

- ・ [OCLCを通じた国立国会図書館作成書誌データ\(JAPAN/MARC\)の国際的提供について](#)

2010年3月30日、国立国会図書館とOCLC(Online Computer Library Center, Inc.)は、OCLCが維持管理する書誌データベース [WorldCat](#) を通じて、国立国会図書館が作成した書誌データ約500万件を世界的に提供することに合意し、今後の協力に関する覚書を取り交わしました。

(掲載日：6月10日)

- ・ [国立国会図書館ダブリンコアメタデータ記述\(DC-NDL\)を掲載](#)

[Dublin Core](#) の最新動向とともに、当館の新しいウェブサービスにも対応するため、2007年5月に公表した「国立国会図書館ダブリンコアメタデータ記述要素」を改訂し、「国立国会図書館ダブリンコアメタデータ記述(DC-NDL)」としてまとめました。今号の記事「[おしらせ：国立国会図書館ダブリンコアメタデータ記述\(DC-NDL\)を掲載しました](#)」でも紹介していますので、ご参照ください。

(掲載日6月30日)

- ・ [ウェブ版の国立国会図書館件名標目表\(Web NDLSH\)を公開](#)

[国立国会図書館件名標目表\(NDLSH\)](#) について、ウェブ上のさまざまなアプリケーションやシステムで活用できるようにした [ウェブ版の国立国会図書館件名標目表\(Web NDLSH\)](#) を公開しました。

(掲載日6月30日)

- ・ [国立国会図書館件名作業指針を掲載](#)

従来「国立国会図書館件名標目表 序説 付録B」として提供していた普通件名の作業指針を拡充し、個人名、団体名などの固有名件名の作業指針と合わせ、件名作業全般のマニュアルとして新たに公開しました。

(掲載日6月30日)

- ・ [分類・件名 国立国会図書館件名標目表\(NDLSH\)2008年度版追録\(2010年3月～2010年5月および2009年4月～2010年1月細目\)](#)

2010年3月～2010年5月に更新した件名標目のリストです。各月に新設した件名には以下のものがあります。

2010年3月：「価値創造経営」「からくり人形」「証明(数学)」

(掲載日：4月26日)

2010年4月:「シュークリーム」「地籍測量」「バリアフリー映画」

(掲載日:5月14日)

2010年5月:「産業医」「電子書籍」「立憲主義」

(掲載日:6月7日)

・ [雑誌記事索引採録誌一覧を更新](#)

当館が作成している雑誌記事索引に、現在記事を採録中もしくは過去に採録したことのある雑誌の一覧を更新しました。2010年5月28日現在の採録誌総数は、19,627誌で、そのうち、現在採録中のものは10,201誌、廃刊・採録中止となったものは9,426誌です。

(掲載日:5月28日)

編集者からの一言

今年の4月に総務部から収集書誌部へ異動となり、NDL 書誌情報ニューズレターの編集にも携わることになりました。「編集者からの一言」、何を書こうか迷ってしまいます。そこで、頭の体操とばかりに、近ごろ巷で流行っている「なぞかけ」を一つ考えてみました。

「タイトルからは検索できない資料」とかけまして、「天才プロゴルファーといえば××遼」ととく、そのところは「〇〇がヒントになるでしょう」。

正解は・・・「けんめい(件名・県名)がヒントになるでしょう」です。もちろん前段は件名による検索、後段は石川遼選手の苗字が県名(石川)であることをかけています。図書館員ならすぐに答えがわかるでしょう。でも、「件名」というのは、一般の人にはなかなか思い浮かばない言葉です。事実、私は図書館に関心を持つまでは知りませんでした。

件名や分類を利用することで、図書館資料を効率的に探すことができます。当館では、長年培ってきた資産である「件名」をより広く、身近に使っていただくために、ウェブでの提供など新たな取組をはじめています。

私もこれまでの総務の仕事から、セマンティック・ウェブ、RDF、SKOS など耳慣れぬ単語に戸惑う日々が続いていますが、「懸命」に頑張っていきたいと思います。

(収集・書誌調整課 書誌調整係 ○凹)

NDL 書誌情報ニューズレター(年4回刊)

2010年2号(通号13号) 2010年6月30日発行

ISSN 1882-0468/ISSN-L 1882-0468

編集・発行 国立国会図書館収集書誌部収集・書誌調整課

〒100-8924 東京都千代田区永田町 1-10-1

E-mail: bib-news@ndl.go.jp (ニューズレター編集担当)